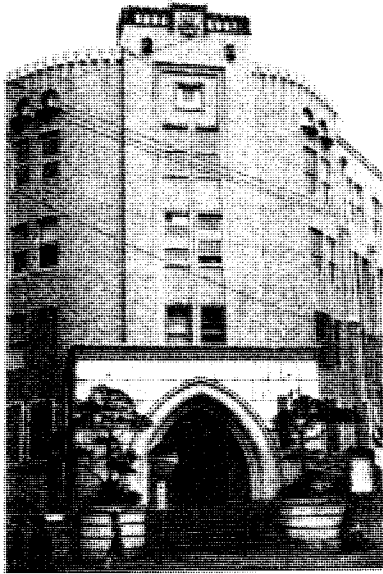


桜工 会 報

1975.3 Vol.22 No56 日本大学工科校友会



叙勲祝賀会の挨拶

名誉教授 鈴木雅次

終戦後の我国で、勲章の制度が復活してから、再叙勲、即ち勲章を二度も頂戴するが如きは、一般には、仲々むつかしい問題であります。私の戦後の叙勲は、此の度びのものを入れて、四回の多きに達しました。即ち其の第一回は、藍綬褒章、次は賜盃の相受、次は文化勲章、そして此の度びの勲一等瑞宝章と合計四度になりました。

私の土木工学の方面でも、先輩や同僚の中には、私よりもっと功績のあった仕事をされた方も居ましたが、それ等の方々は、早くなくなられたために私だけが長く生き残り、その長寿のお陰で、此の叙勲の榮与に該当したのでありまして、まことに恐縮の至りであります。

よって、其の長寿を保った、この秘訣は何かと聞かれる事が度々ありました。

私の時代と言っても、もう五六十年の昔に於ける外国留学の時のスベニア集めには、行く先き先きの名所絵はがきを買い集めるのが、最も普通でありましたが、私のコレクションは、夫れとは違って、行く先き先きで歌はれる唄の楽譜、即ちその音譜を買い集めたのであります。

其のコレクションを見た日大の若い学生諸君が、さも私に音楽理解の素養でも有るかのように、買いかぶって、遂に日大全楽のコーラス部長に迄私を推し上げてしまった。

もっともこの合唱団のテクニックの方は、斯界第一人者の栗木正さんが、お引き受けになり、私は其

の運営面の印こを捺すだけのコーラス部長に過ぎなかったが、そこは、門前の小僧何んとやらの喩の如く、永年それをやって居る中に、独乙のリードや、伊太利のポピュラー、さては米国のハワイヤン迄では、些か自演が出来るように成りましたから、我が日本で目下流行の歌謡曲の程度なら、早速覚えてしまいますから、其のメロディをもじってのゴルフの替歌で、酒宴の席を賑はす事も出来るようになりました。

然し其の歌謡曲の如きは、出来ては消え、消えては又出来る果かないものだが、その流行自体は常に新鮮で、常に新しく、常に亦ユニークでありますから、其のユニークで新しく又新鮮なる者だけを、四六時中つねに見詰めて居る人には、老衰は起るはずがない。夫れが私の長生きの秘訣で、その長寿のお陰で、度々の叙勲の榮に浴したのだと言って来たのであります。

然し此の歌曲の程度は、私にとって所詮は単に裏芸の道楽に過ぎなくて、私の表芸の本職は、どこ迄でも土木工学でありますから、其の表芸の土木工学をひき上げて、日本大学と初めての関係が出来た私の出会いは、遠く日大に高工のできた昔に溯りますが、その後即ち昭和五年に、私学としては全くの初めて、土木工学の大学部が、我が日大に設置されるや、私も亦その創立の相談役となり、受持った講座は、港湾工学でありました。

其後に本職の内務省の方で、土木技術官の人事を

見なければならぬ立場に置かれましたから、日大の方の講義だけは、ご遠慮申し上げたが、その後は全く形式の問題でしたが、新に土木の先生をご採用になる場合には爾今私の評定やら、ガランテーやらの為め、私の印が必要となって教授だけの名が残ることになり、其のめくらばんの捺し代として毎月金50円也を頂戴しましたが、戦前の50円は大枚のお金でした。

終戦の年に内務省をやめて役人の足を洗い、いよいよ学園の先生商賈に身を転じてからは、日大の専任教授となって、その講座は前に述べた港湾の外に、土木行政法も受持つことになりました。

これ等の講義を長く続けている中に定年に達しましたから、正式な専任教授をやめました、その時卒業生の皆さん方の大変な御尽力で、名誉教授と言うものになりました。その称号は、日大では余程本学に功績のあった人に限って与えられる洵に重要なもので、現に私がそれになった当時では、理工学全体を通じて外には1人も居なかった程でありました。又その為に顧問教授ともなって現在に及んでいます。

さて、又終戦の後に我が日大の本部では、国土計画に関する研究所を初めて設置しましたが、時恰も我が政府に於て国土庁を新に発足させて再び脚光を浴びるに至りました。その国土計画なるものは、元来その75%までが我が土木工学のごやっかいになる学問ですから、その専門家の私が所長に任命され、此の席ここにお見えになっている田谷さんがその主事として、此の研究所が発足しました。尚その研究所の所属が本部なる点に、重要な意味がありました。国土計画なるものの元来は、之が手段としては理工学分野に属しますが、その成果は、当然に政治経済等に墳連するものがあるから、それら広い分野の先生方のご協力を得る為めにこの研究所が本部所属となったのであります。

此の研究所が、最大に力点を置いたのは、国土開発をもたらす効果が、如何様に相成るかを、知るための計算でありましたが、そのヒントは戦後の南イタリ一開発の効果算定に、ハーバート大学のレオンテーフ・アナリシスの算定式が採用された事でありましたが、そのレオンテーフさんは昨年のノーベル賞の授領になられた人ですが、我が研究所では、大分県開発の効果計算に、アメリカ伝来の元の式をそのまま使用しました。その算式は畳3畳敷に及ぶ尨大なものとなり、計算には40日も掛った程の大きな算定式となりました。結果は、そこに矛盾撞著が多くて、我が日本では当抵適用し兼ねることが発見され、元の式の大修正が行はれたのであります。

其の修正は、3つであったが、その中で最も重要なのは我が日本では、資源の有り余る米国などと違

って、限界のある国内資源が多い点でありました。例えば石油や生ゴムの如きはその主なものであります。それ等の限界から生ずる隘路産業を算式の中に取り入れられたのであります。

この日大の修正式を、実際に適用したのは、岡山県の開発効果を算定した時でありましたが、その算式のひろがり、畳4.5畳に拡大されたが、原子計算機のお陰で、その計算は僅か半日で精確な答を出してくれました。

最近のノーベル賞の儀式をテレビで見ましたらレオンテーフさんも、大分お年を取られたご様子でしたが、その研究心は益々お盛んで、此頃のご研究はポリューションのマトリックス即ち公害の算定式であります、それには、我が日大の修正式の応用が大切と思われ、又今日我が国最大の課題である石油の制限が及ぼす他の諸産業への影響も、限界資源を主体とせる我が日大式の応用に過ぎないと思っております。

此の様な研究所の所長にせよ、又は前に述べた大学の教授にせよ、その責任観から、常に新鮮でユニークであるようにと私を励まして便達しつつ呉れたのは、其の位置に据えた日大そのものに外か無かつてありますから、初めに述べた裏芸のコーラス部長にせよ、此の表芸の土木工学にせよ、私をして常に其のユニークで、新鮮なるものへの凝視を忘れさせ無かつた為に、つい此の85才（去る3月6日の満で）迄でも長が生きが出来、その長寿のお陰で此の度びの叙勲の光榮に浴するに至った事は既に冒頭で述べた通りであります。

私の叙勲の寄って来った元を正せば早意するにその責任を常に深く感ぜさせる位置にお据えくださった、我が日本大学に有ったのであります。

此の様に私の叙勲に大恩の有った日大に有縁の皆さん方、即ち日大土木科卒業の皆さん方、200名にもぼる多数お集りの上で、本席の如き盛大なる祝宴を、私の叙勲に対してお催し放されましたことは、私の喜び將に最高にして最大のものであります。ただただ恐縮と感激の至りであります。更に家族のもの迄もお招きくださいませ、尚又本部よりは、総長さまや理事長さま、惑は又特に私に関係の深い方々、そして理工学部からは、新田部長さま方もご参加相成って、錦上さらに大きな花をお添え被下れました。此の席にご参集の皆さまに、慈に謹んで厚く厚くお礼を申しあげて、私のご挨拶を終らせていただきます。有難度うございました。



編集後記

今回も、工科校友会会員諸兄のご協力により“桜工”を発行でき、会誌委員一同、感謝に堪えません。

会誌委員とは申せ、この種の仕事については素人ばかり。全国の校友から原稿や写真を頂き、大学当局のご支援を得る等、暖かいご援助のもとに、会誌ができあがる訳であります。一冊の小冊子を作るために、何回も集まっては、夜おそくまで、額を寄せ合って苦勞した事も、この会誌に負わされた使命を思うと、何でも無いものに思えます。

さて、毎回感ずる事ですが、地方支部、職域支部

のニュースにしても、他の記事にしても、どうも、土木、建築の両科で相当のスペースを占めてしまいます。

全会員の会誌として、各科の記事を万べんなく記載するよう努力しておりますが、他の科の校友諸兄におかれても、積極的に原稿をお寄せ下さるよう、今後とも、ご協力をお願いする次第であります。

内外ともに厳しい状況下、校友各位のご健勝を祈ります。

(木村)

■桜工会報■会誌委員／委員長中山隆(土木)／土木・下青木秀吉、木村吉己／建築・丸田操、広瀬力／機械・両角豊志、黒瀬元雄／電気・高橋信夫、河村陽男／化学・伊藤和雄／薬学・山内盛

■昭和50年3月25日印刷／30日発行■編集兼発行人／中山隆■発行／日本大学工科校友会(東京都千代田区神田駿河台1の8／電話東京293-3251内線206／振替・東京162710)■印刷／光星印刷株式会社
